

〈特集〉産後うつ病の評価と介入から～育児支援に向けての新たな展開～

◎(1)基礎的解説編「妊娠・出産・育児に関連するメンタルヘルス」

発達障害児の育児支援における 母子交流の質的検討の重要さ

東海大学健康科学部社会福祉学科教授 小林 隆 児
東海大学健康科学部看護学科講師 井上 玲 子
狛江のんびりクリニック看護師 稲岡 勲

キーワード 関係発達臨床、自閉症、関係障害、原初的知覚、原初的コミュニケーション

1. ある事例の印象的なエピソードから

最近筆者が関係発達臨床の現場である Mother-Infant Unit (MIU)¹⁾で経験した印象深いエピソードを紹介することから始めよう。母親に連れられて相談に訪れた1歳の男児 (T男) であるが、当時の母親の不安は、子どもが自分になつかず、関係がとりづらい、自閉症ではないか、というものであった。発達歴は以下の通りであった。

事例 T男 初診時1歳0か月

胎生期、切迫流産しそうになったことがある。新生児期、泣き声が弱かった。3か月、あやしても笑わない。抱くと全身固くして緊張が高い。おなか空くと泣くが、母乳をやるとすぐにおとなしくなって寝る。首が座ってからは立て抱きをしてもらいたがり、母子の肌が触れ合わない。抱っこしようとしても自分から身体をひねって、母に背を向ける。4か月、寝返りやずりばいをしていった。自分から抱っこを要求しない。おすわりもまったくしないで、すぐに立とうとする。じっとしておらず、いつも落ち着かない様子であった。6か月、歩行器を使わせると終始機嫌はよく、ひとり遊びのことが多い。8か月、つかまり立ちができるようになると、その数日後には手を離して一人歩きをするまでになった。12か月、関係がとれにくいという母親の不安から、小児科クリニックを受診し、そこで筆者が紹介された。

早速 MIU に導入して関係支援を開始したが、第3回のセッションでの両親との遊びの場面である。

最初の頃、T男は電車を並べたり、ボールを転がしたり、短時間で次々に遊びは変わっていった。その時のT男の動きを見ていると、とても楽しんでいるとは感じられず、ただ何となく玩具を扱っているだけにみえた。そんなT男の動きに父親も母親もただ遠くから見つめるだけでどうかかわっていないかわからず、いつも重苦しい空気が漂っていた。

第3回、遊びの途中で、T男は滑り台に興味を示し、滑り台の下から上へ、反対方向から登り始めた。T男がなかなかうまく登れない様子を見て、母親はT男の靴下を脱がせてやった。すると、T男は機嫌よく登り始め、夢中になった。そんなT男の反応を見てうれしくなったのか、両親はT男に積極的に関わり始めた。T男の様子を少しの間見ていて、うまく登れないT男を母親は抱き上げてやり、一番上に乗せ、滑り台を滑らせてやった。それを両親は数回繰り返した。両親はT男と一緒に遊べたことがうれしかったようであったが、T男はなぜか滑った直後、突然不快そうに「んーんー」とうなり声を発しながら滑り台に頭を数回自分で打ち付けるのであった。

われわれがいたく刺激されたのは、この場面です。T男が滑り台を滑った直後に頭を台に打ち付けた

のはなぜかということであった。親は子に対してよかれと思って行ったことではあったが、どうもこの時のT男は両親の関わりによって不快な思いを体験しているようであった。T男の見せた行動は発達障害領域で良く目にする自傷といわれるものである。ここで、T男が見せた自傷がどのような状況で生まれたのかを検討することによって、発達障害(のみならず一般的に)になぜ自傷が生じるのか、その原因を探る手がかりを得ることができるようになる。そこで重要な視点は、子どものみに焦点化するのではなく、この状況においてどのような親子の交流が展開していたのか、その関係のありようをダイナミックに把握していくことである。

2. 遊びの中で生まれた親子のあいだのズレ

T男は滑り台を反対方向から全身を使って懸命になって登っていた。その際の全身で感じ取っていたある種の感覚を楽しんでいたのであろう。しかし、両親はT男が滑り台をうまく滑れるようにとの思いから、滑り台の上に乗せてやってT男に滑ることの面白味を体験させてやろうとした。滑り台という遊具はまさにそのような目的をもって作られたものだから、両親の取った行動は常識的な感覚からすればさほどの違和感はない、というよりも当然だと受け取れるかもしれない。しかし、T男が「いま、ここで」この遊具を用いて何をどのように楽しんでいるのか、そのことがこの時の両親にはなぜか感じ取ることが困難であったのである。

われわれは、この時両親が見せた働きかけそれ自体だけを取り上げて問題視しようとしているのではない。先の場面でT男が今どんなことに夢中になっていたかを考えると、子どもと両親とのあいだにどこか遊び方をめぐって大きなズレが起きていることがわかる。それを一言で述べるとすると、両親の意向と子どもの思いとのあいだに生まれたズレである。

3. 親子の遊びになぜズレが生まれるのか

われわれはこれまで生きてきた中で、身の回りにある無数ともいえる対象が生活の中で何を意味するか、多くの場合さほど意識することなく暗黙のうちに体得している。ひとつの対象が同じ文化的背景の中である共通の意味を担っているのである。したがって、ある対象を前にした時、われわれは必ずそれをなんらかの意味を担っているものとしてとらえようとする。滑り台という遊具を前にすると、階段から上ってそこから下に向かって滑って楽しむ。まさにそのような用途を目的とした遊具なのだから、われわれがそのようにして子どもを遊ばせようとするのはごく自然の成り行きだということではある。しかし、T男においては、その時これが滑り台という遊具でこのようにして遊ぶものだという認識は乏しく、「いま、ここで」T男が夢中になったのは、上り坂を懸命になって登ろうとすることによって全身で体感していること、まさにそのことにあったということができる。

よく考えてみると、このようなズレは子どもとわれわれとのあいだでは起こりがちなことである。ただ、この事例でその深刻さを増しているのは、このようなズレがごく日常的に連続して起こっているために、両者の関係がいよいよ深刻さを帯びているということである。

われわれの認識世界を支えているのは、人間特有の高度に分化した知覚機能である視覚と聴覚である。われわれのコミュニケーション世界はこのような知覚機能によって多くの場合支えられていることはまぎれもない事実である。しかし、発達障害といわれる子ども達、その中でも対人関係が容易には成立しがたく、特有な認知面の障害を呈する子ども達においては、われわれと共通の認識を有しがたく、対象の知覚のあり方も独特な性質をもっている²⁾。それは未分化な段階での原初的な知覚で、五感に分化する以前の段階でのあらゆる知覚に通底するような性質をもっている³⁾。共通

感覚、無様式知覚、力動感、相貌的知覚などと称されてきたものである。

このような知覚のありようと対人関係の広がりとのあいだには密接な関係がある(図1)。いまだ対人関係が養育者との特定二者関係の段階にあっては、未分化な原初的知覚に強く依存した世界で子ども達は生きているが、われわれはそれとは違って、不特定多数の人々との関係世界に身を置き、日々生活している。そこでは特有な分化を遂げた視聴覚優位なコミュニケーション世界で関わり合うことを余儀なくされていることが多い。このように対人関係の質とそこでの知覚の特性との間には深い関連性があるため、どうしても子ども、とりわけ対人関係に困難さを有する子どもと関わり合おうとすると、先のようなズレを生みやすい。それは単に親の接し方が悪いといったように、個人の病理あるいは問題として矮小化することはできない、コミュニケーション構造そのものに内在した根源的問題なのである。

4. ズレの問題の起源はどこにあるか

MIUにおいてわれわれは初回時に母子間の愛着関係の質的評価のために、新奇場面法(Strange

Situation Procedure; SSP)(図2)⁹⁾を実施しているが、そこで特にわれわれが重視しているのは、母子間の分離と再会時に示す両者の関係のありようである。T男の場合、つぎのような特徴が認められた。

(ここでは特に、図2の場面④、⑤での印象的なことがらを中心に述べる。)

母親はT男に対して積極的に関わろうとするが、T男はそれに対して母親の接近からすり抜けるように他のことに関心が移っていく。そのため母子間で交流が芽生えない。T男は母親に対して回避的行動が顕著。母親の焦燥感からくるT男への接近はかなり強く不安を駆り立てるものがある。そのことがT男をこのような行動へと駆り立てるように感じられる。

④しかし、母親が退室するとすぐに反応して、母親の姿を目で追っている。ドアが閉まり母親の姿が消えると、明らかに困惑した表情になる。しかし、訴えるような泣き声はまったく出ない。ぐずるような声をわずかに出したけれども、それは極めて弱々しいもので聞いていてこちらの感情をかき立てるほどのものではない。口は閉じられていて、発声そのものを抑えているように見える。

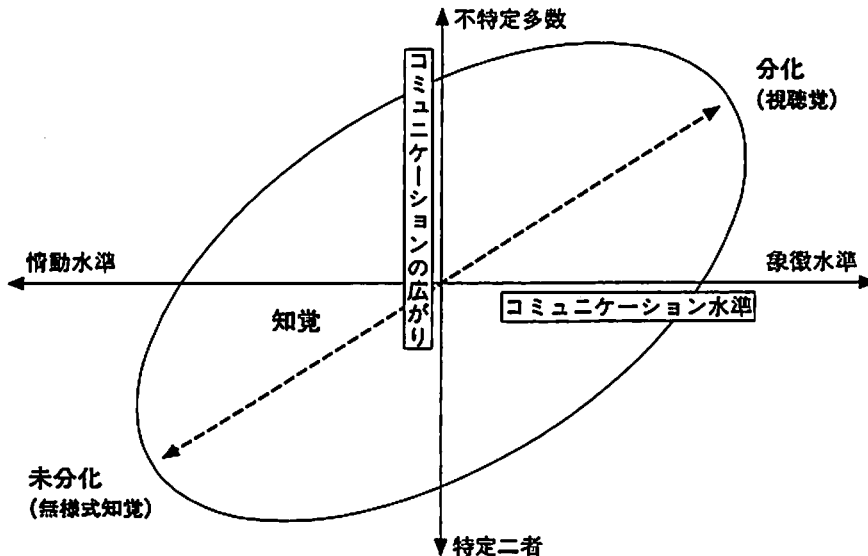


図1 コミュニケーションの広がりとは知覚機能の分化

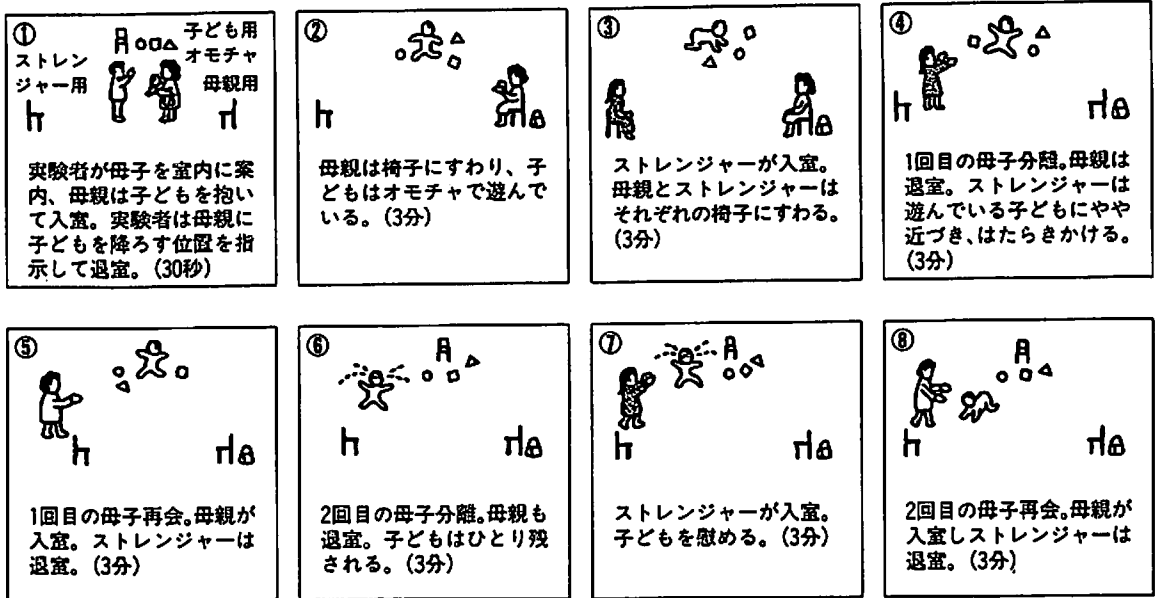


図2 新奇場面法⁹⁾

音に急に敏感になって周囲の様子をさかんにうかがう様子を見せ、音がするとその方向に近づいていく。母親を求めて行動を起こすのではなく、自分でなんとかしようとするふうに見える。strangerが抱きかかえてあやそうとしても一向に泣きやむ気配はない。ただし、泣き方はさほど強くない。弱々しく、こちらに訴えかける強さはさほど感じられない。最後までぐずったままである。

⑤母親との再会。母親が入室すると、すぐに母親の方に接近して自分から抱かれようとする姿勢をとって、抱っこしてもらおうが、抱きかかえられそうになると、すぐに先ほど見ていた玩具の方に目をやり、ついで退室する stranger の方を目で追い、母親の方に注意が集中しない。母親に抱かれると途端におとなしくなり、訴えて泣く様子ではない。居心地はよくないのか、ぎこちない抱かれ方で、すぐに下りたがるため、母親も長時間あやすことはできない。ただ、機嫌のよくない状態が続く。眠たいのか、おなかがすいたのか判然としませんが、ぐずる状態が続いている。母親が抱っこしながらT男にクルクルスロープを取り出して自分でやってみせると、T男も興味を示して自分からやり始めた。その時、母親はT男のうしろから

T男を抱きかかえて支えていたが、そのあと母親は思わずT男の前に移動してT男に正面から働きかけ始めた。するとまもなくT男は興味が失せたかのようにしてその場から去っていった。

ここで特記すべきことは、T男が母親に対して見せた微妙な気持ちのゆれである。母親がいなくなると、T男に不安な気持ちがどんどん高まっていることは手に取るようにわかるが、母親を追い求めて強く自分を主張することはしない。どこか回避的な態度が目立っている。そのもっとも象徴的な反応が母子再会場面での母親に向ける気持ちのありようである。母親と再会してうれしかったことは確かなようにも思えるが、なぜか母親が子どもを抱き寄せようすると、途端にT男の注意はstrangerの方に移り、まるでもう母親への思いは消えたかのような態度である。激しく母親を求めようとしないのである。その後の経過で明らかになるのであるが、T男には母親に対する強い関係欲求(甘え)が潜在的にあることは確かなのだが、なぜか母親といざ関わり合おうとすると、回避的になってしまっている。このような関係の特徴があるため、この母子関係はなかなか深まって

いかない。このような関係のむずかしさが生じてしまうと、母親の焦燥感や不安感はますます強まり、それがさらに両者の関係を難しいものにしてしまっている。その起源にはT男にみられる母親に対する関係欲求をめぐるアンビバレンス(図3)があるからだと思われるのである³⁾。母親への強い関係欲求はあるが、いざ二人で関わり合おうとするとなぜか緊張や恐れが起こり、回避的になってしまう。そのためにジレンマが生じ、いよいよ関係欲求は強まっていく。そのことがますます母親への接近恐怖をもたらす。このような関係の悪循環が生じていくことによって、子どもには強い欲求不満が生じてしまうというわけである。

5. アンビバレンスによって生まれる 関係の悪循環

ここで先に述べたT男の自傷を引き起こしたエピソードを思い起こして欲しい。親が子どもに働きかけようとする際に働いていた動因は、「滑り台」はこうして遊ぶものであるというひとつの教条的な考えである。それは図1における右上の領域で示されるわれわれの通常のものへの捉え方である。しかし、T男の行動の動因となったものは、全身で感じ取った身体内部感覚やそれに伴う情動の高まり、つまりは原初的知覚の働きによっている。図1における左下の領域で示される世界である。ここに生まれたズレも、先ほどと同様に、コミュニケーションの構造に内在した必然的に起こりうる問題だとみなさなくてはならない。

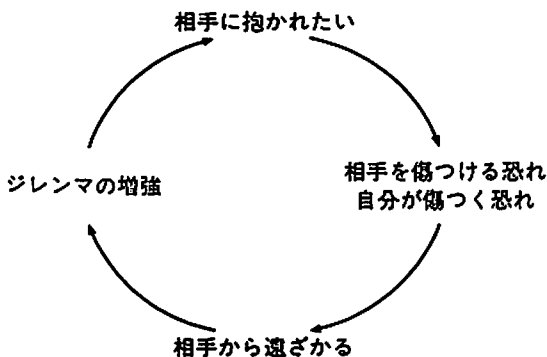


図3 関係欲求をめぐるアンビバレンス

このようなズレが深刻化していくのは、子どものアンビバレンスと母子関係の悪循環によってもたらされた関係欲求(愛着)の問題と深く関係している。本来であれば、愛着形成に伴って母子相互間で情動、意図、動因などが通底することによって、母親は子どもに容易に成り込むことが可能になり、その一方で子どもには母親の取り入れが起こる。しかし、乳幼児期早期に母子交流に深刻な問題を有する場合には、愛着形成の問題が起こり、それは母子間に強い緊張をもたらし、その結果情動水準の(原初的な)コミュニケーションに破綻を来す。そして、子どもには強い動因的葛藤⁷⁾が生じ、T男にみられるような自傷その他の負の行動上の問題が起こるのである。

6. 関係欲求をめぐるアンビバレンスと自傷

関係欲求をめぐるアンビバレンスがいかに強くて深刻なものかをとてもよく教えてくれたのが、SSPを実施したあとの両親とのビデオ・フィードバックの際に偶然起こった出来事であった。

われわれはSSPを実施した後に、すぐ別室に移動してSSPの様子が記録されたビデオを両親と見ながら振り返っていた。部屋の中を動き回っていたT男はビデオデッキに興味を示し、ビデオテープの挿入口に手の指を突っ込んだ。T男はすぐに手を引こうとしたが、指が蓋に挟まり取れなくなった。おそらく痛みと不安を体験したのであろう。T男自身も少しばかり驚きの反応を見せたが、激しく泣き叫ぶことはなかった。その直後、遠巻きにぎこちない歩みで母親の方に近寄っていった。しかし、母親に泣いて痛みを訴えることなく、驚いたことに母親が座っていた椅子の背もたれの方に行って自分の頭をそこに打ち付けたのである。

このことから、T男が母親に関係欲求を抱いていることは確かなのだが、それを直接的には表現することができず、強い葛藤によって背もたれに頭を打ち付けるという自傷が誘発されていることがわかる。愛着の問題がこのような負の行動を引

き起こしてしまうことをよく教えてくれるエピソードである。

7. 養育者の映し返しと子どもの内的世界

われわれは身の回りの世界を自分なりに秩序化して捉えることによって、それなりのこころの安定を得ているということは疑いようのない事実である。このようなこころの営みはいくつになっても常に働いているものであるが、乳幼児期早期という全くと言っていいほど未知の世界に取り囲まれている子どもにとって外界の意味を知るすべは、養育者に絶対的とまでいわなくても大きく依存していることは確かである。したがって、子どもが〈いま、ここで〉どのような体験をしているかを的確に感じ取り、その(文化的)意味を養育者が映し返してやることは、子どもの認識世界を育むためには決定的な重要性を持つ。もし、養育者が子どもの体験世界を感じ取ることなく、ある種の教条的な考えや価値観に囚われて映し返すことを繰り返していくと、子どもは自らの体験世界をどのように意味づけていったらよいか混乱し、混沌としたこころの世界に身を置くことになりはしないだろうか。人間の認識を支えていることばが、子ども自身の内的世界を豊かなものにしていくか、それとも混沌としたものにしていくか、それを決定づける上で、養育者を初めとするわれわれの映し返しの質は重要な意味を持っているのである⁹⁾。

8. 母子交流の質的検討と子どものこころの発達

学問の世界において、これまで子どもの発達や病理の理解は、「個(体)」という視点から出発して論じられてきた。たとえ「(養育)環境」の重要性を指摘することはあったとしても、あくまでそれは副次的な問題として捉えられることが多かった。

Winnicott⁸⁾が述べているように、赤ちゃんは一個の個体として存在するのではなく、養育者との関係、すなわち1組のペアとして初めて存在する。脳そのものが開放系の組織であるといわれて

いるように⁹⁾、個体に認められる様々なこころのありようは、個体の中で自己完結的に変化していくのではなく、とりわけ乳幼児期早期においては養育者との濃密な関係の中で、人間的なこころの営みが展開され、その結果が子ども自身の個性や特徴として表現されていくのである。

その意味からもその後の子どものこころのありようを理解していく上で、乳幼児期早期の母子交流の質的検討はより一層重要な意味合いを帯びてくるといわざるをえない。そこでわれわれに今後より一層求められるのは、〈いま、ここで〉子どもと養育者とのあいだでどのようなことが生起しているのか、その緻密な質的検討であるように思う。そのような蓄積によって初めて、従来の個体に立脚した能力中心の発達観から脱する¹⁰⁾ことが可能になるのではなかろうか。

追補：当初依頼された題目は「……母子相互作用……」であった。相互作用という用語には相互に働きかけるという意味合いが強いが、原初的なコミュニケーションは互いの中で気持ちが通底する、あるいは共有されるという性質をもつことから、筆者はあえて「母子交流」という用語を選択した。

〈文献〉

- 1) 小林隆児：自閉症の関係障害臨床—母と子のあいだを治療する—、京都、ミネルヴァ書房、2000
- 2) 小林隆児：自閉症の発達精神病理と治療、東京、岩崎学術出版社、1999
- 3) 小林隆児：自閉症とことばの成り立ち—関係発達臨床からみた原初的コミュニケーションの世界—、京都、ミネルヴァ書房、2004
- 4) Werner, H.: Comparative Psychology of Mental Development. New York, International University Press, 1948. 鯨岡 峻・浜田寿美男訳：発達心理学入門、京都、ミネルヴァ書房、1976
- 5) Ainsworth, M. D. S., Blehar, M. C., Waters, E. & Walls, S.: Patterns of attachment: A psychological study of strange situations. Hillsdale, NJ: Lawrence Erlbaum Associates, 1978
- 6) 古澤頼雄：愛着ネットワークの形成・発達、柏木 恵子・古澤頼雄・宮下孝広(著)、発達心理学への招待、p.62、京都、ミネルヴァ書房、1996
- 7) Richer, J.: An ethological approach to autism: From evolutionary perspectives to treatment. In:

- (eds.), Richer, J. & Coates, S. Autism : The search for coherence. Jessica Kingsley, London, pp.22-35, 2001
- 8) Winnicott, D. W. : The family and individual development. London, Tavistock, 1965. 牛島定偲(監訳) : 子どもと家庭—その発達と病理—、東京、誠信書房、1984
- 9) 松本 元 : 愛は脳を活性化する、東京、岩波書店、1996
- 10) 鯨岡 峻 : 子どもの発達を「個」からみること、「関係」からみること、そだちの科学、1、10-16、2003

* * *